

# 琉球大学学術リポジトリ

知的障害のある児童の「伝え合う力」を高めることを目指して一国語科の「聞くこと・話すこと」を中心とした授業展開の工夫一

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 當眞, 正太 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019851">https://doi.org/10.24564/0002019851</a>

## 知的障害のある児童の「伝え合う力」を高めることを目指して

### —国語科の「聞くこと・話すこと」を中心とした授業展開の工夫—

當眞 正太

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・沖縄県立島尻特別支援学校

#### 1. テーマ設定の理由

知的障害のある児童の特性として、相手に伝わるように話をしたり、相手の話を受け止めて返したりするといった、双方向的なやりとりが苦手なことがある。筆者はこれまでの教育活動を振り返ってみると、児童が双方向的に伝え合うことを意図した授業設定や関わり合いの工夫を十分に行うことができていなかった。つまり、児童が話したことや伝えたいことを受け止め、伝わっていることを言葉や動作で返すことを意識的に実践するまでには至っていなかった。また、他者との関係性を形成する際に、児童の思いや言いたいことの代弁、周りの児童との関わり合いの工夫に欠ける部分もあり、実態に応じた対応や協働での学習の実践に課題が残った。一方、チームティーチングで取り組む特別支援学校の授業では複数の教師が児童に関わるため、目標の設定や評価の視点において共有を図ることが重要となる。しかし、著者のこれまでの実践においては、実態の見取りや評価規準が曖昧であるため、実態を踏まえた授業展開まで至ることができず、ステップアップを図った実践につなげることが十分に行えなかった。

知的障害の特別支援学校学習指導要領解説各教科編(2018a)の国語科では、『『伝え合う力を身に付ける』とは、身近で関わりのある大人や学校の友達などの人間と人間の関係の中で、言葉を通して理解したり表現したりする力を身につけることである。』と示している。また、「聞くこと・話すこと」に関する内容では、身近な人の話し掛けに注目したり、応じて答えたりすることや自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや考えを受け止めたりすることについて示している。さらに、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(2018b)では、「6 コミュニケーション」において、児童の障害の種類や程度、興味・関心等に応じて、表情や身振り、各種の機器などを用いて意思のやりとりが行えるようにするなど、コミュニケーションに必要な基礎的な能力を身に付けることとし、それにより人とやりとりをすることや通じ合う楽しさを感じさせることで、他者との相互的なやりとりの基礎的な能力を高める指導の重要性を示している。言いかえるならば、国語科や自立活動において、「伝え合う力」を高めていくことは、児童が自分の考えを相手に伝えることで、自己の特性を理解し、自分を認め、他者に支援が求められるようになることや他者と関わる力など、人間関係の形成に大きく影響を与えると考えられる。

本研究では、知的障害のある児童の「伝え合う力」を、相手にわかるように言葉や動作で伝え、また、相手が伝えたいことを自分もわかるという双方向的なやりとりをする力であると捉え、国語科の「聞くこと・話すこと」を中心とした授業実践に取り組む。「伝え合う力」を育成するためには、児童からの言語の表出や発信を的確に受け止め、言語化し、代弁をするなど、児童の思いや考えを主体的に伝えることが大切である。また、教師と児童、児童同士の相互のやりとりを意図的に進めていくことも重要であると捉え、授業実践では、個々の児童の実態を適切に把握し、教師や児童同士の相互のやりとりが意図的に進められ、言語の理解を深化させるという視点から、「教材本の読み聞かせ」を中心に授業実践に取り組んでいく。また、指導の工夫を図っていくための目標の設定や評価の工夫についても改善を図っていくこととする。さらに、自立活動の指導や他の教科での指導についても関連させ、児童の「伝え合う力」を高めていく。

## 2. 研究の目的

知的障害のある児童の「伝え合う力」を高めることを目指して、国語科の「聞くこと・話すこと」を中心とした授業展開から、児童の目標設定や支援の手だて、評価の工夫について明らかにする。

## 3. 研究の方法

- (1) 本研究に関する理論研究
- (2) 授業実践と分析（ビデオ分析, ST への聞き取り, 学部職員・保護者への聞き取り）

## 4. 本研究に関連する理論研究

### (1) 「伝え合う力」と国語科の「聞くこと・話すこと」の関連について

小原(2019)は、「伝え合う力とは、話し手と聞き手が相手意識をもち、相手の立場や考えを尊重しながら、双方向的に自分の考えや気持ちを言葉で伝える力である」と述べている。また、森(2008)は、「目の前にいる『他者』を『享受』することによる学びは、まさに『話すこと・聞くこと』の臨場性、即時性においてなされるものである。」と述べている。このことから、伝え合う力とは、相手意識をもって話したり、聞いたりすることを双方向的にやりとりする力だと捉えることができる。

知的障害の特別支援学校学習指導要領解説各教科編(2018a)では、小学部国語科の目標を「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」として、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に関する3つの目標を示しており(表1)、共通する視点としての「伝え合う力」を示している。また、国語科の目標を、児童の実態に応じて小学部では3段階で示しており、「A聞くこと・話すこと」の内容についても段階ごとに示している(表2)。

表1 小学部国語科の目標

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や判断力を養う。
- (3) 言葉で伝え合うよさを感じるとともに、言語感覚を養い、国語を大切にその能力の向上を図る態度を養う。

表2 段階ごとの内容

段階	1段階	2段階	3段階
内容 聞くこと・話すこと	ア 教師の読み聞かせに応じ、音声を模倣したり、表情や身振り、簡単な話し言葉などで表現したりすること。 イ 身近な人からの話し掛けに注目したり、応じて答えたりすること。 ウ 伝えたいことを思い浮かべ、身振りや音声などで表すこと。	ア 身近な人の話に慣れ、簡単な事柄と語句などを結び付けたり、語句などから事柄を思い浮かべたりすること。 イ 簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をすること。 ウ 体験したことなどについて、伝えたいことを考えること。 エ 挨拶をしたり、簡単な台詞などを表現したりすること。	ア 絵本の読み聞かせなどを通して、出来事の大体を聞き取ること。 イ 経験したことを思い浮かべ、伝えたいことを考えること。 ウ 見聞きしたことなどのあらましや自分の気持ちなどについて思い付いたり、考えたりすること。 エ 挨拶や電話の受け答えなど、決まった言い方を使うこと。 オ 相手に伝わるよう、発音や声の大きさに気を付けること。 カ 相手の話に関心を持ち、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや考えを受け止めたりすること。

上記のように、「聞くこと・話すこと」の内容に関して、3段階の目標や内容を児童の実態に応じて検討し、授業展開の工夫をしていく必要がある。そのことが、児童の実態に応じた目標や内容を明確にすることにつながり、評価の規準や基準を適切に定め、複数の教師で共有し、授業実践に取り組むことが可能となる。本研究では、国語科の単元計画において教材本の読み聞かせ等を中心とした授業を行う。読み聞かせに着目した理由は、児童にとって興味関心を持って取り組める内容であり、授業展開において双方向的な伝え合いが期待できるからである。授業後は、ビデオ分析による振り返りから、目標や支援の手だて、評価について、目標の達成状況やエピソードから明らかにする。

(2) 授業展開の工夫及び自立活動との関連について

特別支援学校学習指導要領解説総則編(2018c)では、「児童又は生徒に作成した個別の指導計画や学校の実態に応じて、指導方法や指導体制の工夫改善に努めること」と示している。国語科の授業展開において、学級や学年間の教師によるティームティーチングを活かし、学習グループを組み替えたり、個別指導と集団指導を組み合わせたり、児童の実態に応じて学習内容に幅を持たせるなどの工夫が考えられる。また、教材等については、児童の興味関心に応じた内容の選定が必要であり、国語科において、文部科学省著作教科書及び学校教育法附則第9条の規定による一般図書（絵本等）を活用した取り組みができる。

また、特別支援学校学習指導要領解説総則編(2018c)では、「自立活動の指導と密接な関連を保つようにしたりすることが望まれる。」と示している。自立活動の区分「コミュニケーション」における言語の受容と表出に関する内容や、絵カード、ICT 機器等の代替手段の活用の工夫、「人間関係の形成」における遊びを通じた関わり合いなどの取り組みを、国語科の集団活動につなげていけるように関連させていくことで、個々の児童の実態に応じた「伝え合う力」を高めていくことができると考える。

5. 研究の実際と考察

(1) 対象学級

9月の課題発見実習Ⅱにて、A特別支援学校小学部4年生の学級を対象に、国語科の単元「言葉と動きで伝えよう！」の取組として、絵本の読み聞かせによる授業の実践を図った。対象学級は、男子4名、女子2名の計6名で構成されており、学級担任2名で指導に当たっている。

(2) 実態と個人目標について

学習面や生活面で実際の関わりを通して児童の実態把握を行った。また、本研究のテーマに関わる「伝え合う力」を、相手にわかるように言葉や動作で伝え、また、相手が伝えたいことを自分もわかるという双方向的なやりとりをする力であることを学級担任と確認し、個別の指導計画や国語科年間指導計画を参考にしながら、本単元に関する児童の実態と個人目標を設定した(表3)。

(3) 単元設定と支援の手だて

児童の実態として、身近な話し言葉による理解があり、自分の思いを簡単な言葉で伝えられる児童、身振りや動作で伝えようとする児童、教師の言葉がけを受けて気分を切り換えて活動に参加しようとする児童と、その実態は多様である。

本単元では、教材絵本として、『だるまさんの』、『だるまさんの』(かがくいひろし ブロンズ新社)を

表3 本時における児童の実態と個人目標及び評価

評価：◎十分達成できた ○ほぼ達成できた △もう少し

児童	本単元に関する児童の実態	本時の個人目標	評価
A	・絵本の読み聞かせが好きで、絵本の内容の一部を、言葉や動作で気持ちを表現することがある。自分の気持ちを教師に繰り返し伝えようとする。発表場面では恥ずかしがる様子が見られる。	・絵本の言葉の響きやリズムを感じて、友達や教師に、言葉や動作で伝えることができる。(知3) ・絵本の場面を言葉と動作で自分なりの表現で伝え、友達の前で表現を受け止めることができる。(思2)	
B	・絵本の内容の理解は高く、質問を聞いて自分なりの言葉や動作で考えを伝えることができる。好奇心があり、前に出ようとする意欲が高い。自分なりに言葉を選んで発言しようとするユニークさが見られる。	・絵本の内容を理解し、言葉の響きやリズムを感じて、友達や教師に言葉や動作で伝えることができる。(知3) ・自分なりの言葉や動作で友達や教師に考えを伝えたり、友達の発表に注目したりして、その表現を受け止めることができる。(思3)	
C	・絵本の読み聞かせが好きである。読み聞かせ後の教師の質問に対して、本人なりに答えようとする。友達の発表を参考にして言葉を選ぶことができる。意欲的に学習に参加することができる。	・絵本の言葉の響きやリズムを感じて、言葉や動作で、友達や教師と伝え合うことができる。(知3) ・教師や友達の表現を見て模倣したり、自分の表現方法で伝えたりして、友達の表現を受け止めることができる。(思3)	
D	・絵本の読み聞かせが好きであり、思ったことを自由に発言することができる。周りをよく見ており、絵本や友達の発表に注目するよう言葉がけすると、落ち着いて着席することができる。	・絵本の言葉や動作を模倣し、自分なりの言葉や動きで友達や教師に伝えることができる。(思2) ・絵本に興味を持って参加し、友達や教師と一緒に、言葉と動作での関わり合いを楽しむことができる。(学2)	
E	・絵本の読み聞かせが好きであり、前に出てきて、絵本を指差したり、言葉や動作で考えを伝えてくれたりする。また、言葉がけで着席したり、友達の発表に注目したりすることができる。	・絵本の言葉の響きやリズムに親しみ、友達や教師と、言葉や動作で互いに伝え合うことができる。(知3) ・絵本の言葉や動作を自分なりの表現で伝えたり、友達の発表を受け止めたりすることができる。(学3)	
F	・教室の後方に座って学習に参加できる。時折、ペランダに移動することもあるが興味のある活動や役割があると前に出たり、着席できたりと意欲的に参加することができる。	・自分なりの表現で友達や教師に、絵本の言葉や動きを伝えることができる。(思2) ・教室内での学習に参加し、発表場面や役割のある際は、友達の前に出て発表することができる。(学2)	

(知)：知識及び技能、(思)：思考力・判断力・表現力等、(学)：学びに向かう力・人間性等

(1)：国語科1段階、(2)：国語科2段階、(3)：国語科3段階



扱った。この絵本は、短い言葉のフレーズを繰り返しながら、ページを捲るたびに真っ赤なだるまさんがユーモラスな動きや表情で身体各部位を教えてくれたり、動作のおもしろさを模倣したりできるといった特徴がある。絵本が好きで、物の名称の学習やお話しの読み聞かせの活動をしてきた本学級の児童にとって、興味関心を持って取り組める教材である。授業展開の工夫としては、大型絵本を活用し、教師が台詞に強弱やリズムを付ける等をして読み聞かせ方の工夫をした。また、児童と一緒に台詞を言って動作化することで、言葉のリズムやおもしろさを体感できるような支援の手だてを行った。また、友達と一緒に身体各部位を言い当てたり、動作を模倣しあったりできるよう、教師が個別の言葉掛けや一緒に活動する等の支援を行った。

(4) 結果と考察

学級担任と一緒にビデオによる児童の様子分析を行った。児童の個人目標の達成状況としては、「◎十分達成できた」の数が、授業回数を重ねるたびに全体的に上がっていった。これは、授業の事前と事後に、時間を設定して学級担任と一緒に単元における児童の実態を話し合い、個々の児童にとっての「伝え合う力」に関する目標設定が明確になったことと、それを達成する支援の手だてについて、個別の言葉掛けや動作化による体験的な設定、好きな場面の選択、絵本読みを児童に任せてみる等の授業展開の工夫を行ったことが成果につながっていると考察できる。課題としては、評価の視点が明確になっていなかったことがあり、教師間で評価の視点が分かれてしまうことがあった。今後は、評価の規準と基準を明確にし、複数の教師による共通の視点を持った見取りをしていきたいと考える。表4は、ビデオ分析から、児童が確かに伝え合っているとわかるエピソードである。

表4 「伝え合う」エピソードの紹介

A児	教室の後方で、だるまさんのしっぽを表現する児童Eを見て、最初は恥ずかしがって動かなかった児童Aが、教師と一緒に「だるまさんのおしり！」と、お尻をふりふりさせて表現することができた。
C児	最初はよそ見が多く、前を注目していなかった児童Cが、積極的に前に出てきてユニークな動作で表現して見せる児童Bに注目して、同じように言葉や動きを模倣して返そうとする様子が見られた。
D児	最初、活動に乗り気でなかった児童Dが、教師や友達の楽しそうな様子を見て、次第に参加するようになり、前に出てきて教師の代わりに絵本の読み聞かせを、自分なりの表現で友達に行う様子が見られた。
E児	児童Eは、絵本の「だるまさんの歯」の箇所、ベランダに移動し、鏡に写った自分を見ながら「歯」を表現していた。そこで、側に来た教師に、鏡を見ながら「歯」を言葉と動作で伝えようとする様子が見られた。
F児	最初、注意散漫だった児童Fは、教師の絵本の読み聞かせによる言葉と動きを真似て、児童Eに、「Eさんの手！」と言葉と動作で伝え、それを児童Eは、「Fさんの手！」と互いに返し合う様子が見られた。

6. 今後の取り組み

授業実践を通して、児童の「伝え合う力」に関する目標が達成されている。また、伝え合う様子のわかるエピソードも見られた。しかし、評価の規準や基準を明確にし、複数の教師で共通の視点を持って取り組むことが十分に図れず、評価の部分に課題が残った。今後の研究において、年間指導計画や単元配列表、個別の指導計画等と関連させ、評価の改善に取り組んでいきたい。

引用文献

文部科学省, 2018a, 「特別支援学校学習指導要領解説 各教科編(小学部・中学部)」.  
 文部科学省, 2018b, 「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)」.  
 文部科学省, 2018c, 「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編(幼稚部・小学部・中学部)」.  
 森美智代, 2008, 「『話すこと・聞くこと』の教育で何を指すのか-思想的背景としてのレヴィナス『他者』論の検討-」, 全国大学国語教育学会国語科教育研究, 大会研究発表要旨集, 114 巻.  
 小原由利, 2019, 「伝え合う力を高めるための学習指導の工夫-話し手と聞き手が相手意識をもったブックトークを通して-」, 令和元年度広島県教育センター長期研修(前期)報告.